

## 令和4年度第2回 新庄市総合教育会議会議録

開催月日	令和5年2月9日(木)
開催場所	新庄市役所301・302会議室
出席者	市長、高野博教育長、栗田正人委員、齊藤浩昭委員、奥山京子委員
欠席者	阿部浩悦委員
事務局	平向真也教育次長兼教育総務課長、杉沼一史学校教育課長、渡辺政紀社会教育課長 東海林主幹、井上教育総務主査、鈴木教育総務主査、小田桐主任、千川原主事
議事の大要	

午後3時00分より、市長のあいさつで、総合教育会議を開会する。

### 1. 開会

### 2. 市長あいさつ

### 3. 協議

学校運営協議会について

(市長)「学校運営協議会について」社会教育課より説明していただきます。

(社会教育課長) 本日の協議案件であります本市における学校運営協議会の概要等につきまして、資料に基づきながら説明させていただきます。

資料に沿って説明

(社会教育課長) 引き続き、学校における具体的な取り組みや活動状況など、新庄小学校の高橋校長先生から紹介していただきます。

(高橋校長) 新庄小学校の運営協議会の内容に基づいて説明させていただきます。今年度スタートしたばかりのため、これから取り組みたいことも含めてご紹介いたします。

資料に沿って説明

(市長) 学校運営協議会の新庄小学校の例を踏まえ、それに対する意見や感想、質問を含めて、栗田委員から順番に、お願いします。結論は出ないと思いますが、思ったことをお願いします。

(栗田委員) コミュニティスクールについてあまり知らなかったため、自分なりに勉強しました。厚木市のコミュニティスクールの活動事例集を見たところ、非常に色々なことをやっているようでした。

学習サポートの事例では、地域の方がミシンの授業をサポートしたり、鍵盤ハーモニカの演奏をサポートしたり、児童が唱える九九の確認をしたり、書道の授業の補佐をしたりなどがありました。その他にゲストティーチャーとして紹介があったのは、地域の立地の紹介、ボールの投げ方の指導、琴の演奏の指導、体力向上に向けた長距離走の走り方の指導、農作物の栽培方法の説明、稲作や小麦づくり、子育てサロン体験、門松づくり、豆腐づくり、働く車の学習、昔遊びの指導、うどんづくり、バードウォッチング、AED を使ったの応急手当、高齢者施設での体験学習などがありました。クラブ活動の支援としては、茶道、卓球、家庭、囲碁、陶芸など、そのほかにもさまざまありました。また、交通安全教室への協力や、スポーツテストの計測補助、運動会の得点板作り、運動会の準備・片付け、新一年生の給食準備や着替えの手伝い、読み聞かせの実施、折り紙教室、花壇の花植え、学校図書館の蔵書の点検、池の掃除、プランターづくり、学校農園の整備、枝の剪定や草刈り、プールの清掃、机、椅子の高さ調整、特定外来生物の駆除、登下校の見守り、水泳の授業の見守り、長距離走の練習の見守り、校外学習の見守り、通学路の安全点検、様々なことに地域の方々が関わっているというのが厚木市の例でありました。おそらく、この地域でも、学校からの協力の要望があれば、やりたいと思っている地域の方がいるかと思います。そのような時に、新庄小の運営協議会の中でも出てきていたように、メールや SNS 等で簡単に気軽にサポートを呼びかける体制づくりがあれば、学校への手伝いや援助が出てくるのではないかと思います。今の教育現場で使って良いのかわかりませんが、ツイッターやラインなど、様々な手段があるかと思います。そのようなところで呼びかけることも良いのかなと思っていました。また、学校運営協議会の事業は始まったばかりでこれからどんどん進んでいくのだと思いますが、私が一つ良かったと思うのは、運営協議会の中で、人事に関しての項目が新庄市にはないということです。他のところでは、その項目を設けたことによって、学校に様々な混乱を招いたという事例もあったようでした。また、始まったばかりではあるのですが、運営協議会のねらいの一つの「担任の先生と子どもが向き合う時間の確保」のために、コミュニティスクールの役割として何か考えていることはあるのか、もしくはすでに機能し始めているのかについてお聞きしたいです。

(市長) 栗田委員のご質問について、本来は最終的には子どもと向き合う時間を確保することが、サポーターの役割ではないかと思います。学校運営協議会を始めた段階での新庄小学校での感想はどうでしょうか。

(高橋校長) 理想を言うと、中間休みや掃除の時間などに見守っていただけると、その時間にトラブルを起こしている子どもや、適応できていない子どもと向き合う時間の確保が可能だと思っています。そういう形のお願いも話題にはしているところですが、まだ、本校ではそこまで至っておりません。先ほど話題になりましたが、遠足に行った時やミシンの授業などでサポートしていただき、担任と一緒に指導していただいているのが今年度の現状でございます。今後さらに学校に入っただけだと、担任は子どもに関わる時間ができるのではないかと思います。

(市長) 次に斉藤委員、お願いします。

(斉藤委員) 何年か前に、コミュニティスクールという言葉と体制ができたときに、勉強会のようなものが開かれていましたが、当時はなかなか難しいなという印象があり、そこから何年か経過して、

今回、学校運営協議会というものを立ち上げていただきまして、実際に私も本合海小学校の運営委員として、1年間携わらせていただきました。そこでコミュニティスクールとはこのようなものなのだ、といったところが見えてきたような気がいたします。当地区では八向の子どもを9年間育てるという関わりがずっと継続されてきたのですが、その関わりの仕方について、学校運営協議会が立ち上がったおかげですごく明確になったように思います。その人達を通して学校に携わることによって、その責任の重さもありますが、問題や課題があった場合には、解決のために早く着手できるのではないかと感じています。本合海小学校でも、3回目の学校運営協議会が開かれて、協議会のたびに子どもたちの様子を説明していただいたり、或いは画面で見せていただいたりという形で共有していただきました。中でも特徴的だったのが、2年生の図工の授業の中で、カッターを使っていたのですが、黒板にカッターの使い方がかかれています。子どもが2年生くらいの低学年の児童である場合には、家庭では危ないからと使用を止めさせる親もいると思いますが、児童全員にわかるように示すことによってその危険性を察知できるような、そういった授業の内容でありました。或いは、5・6年生の授業では、オレオレ詐欺の電話が、もし家に1人で祖父母がいたときにかかってきたらどうするのか、という話をしていました。そこで祖父母が電話の相手が自分の孫であるかどうか判断できるようなスイッチを入れてあげないといけないという話を先生がしていました。そのスイッチが入ることによって、自分の孫以外からの電話に気づくことができるようになるかと教えていました。その授業を通して、この子どもたちは、家にそのような電話があったときに対応ができるようになるのだろうと感じました。そういう教科書にはないかもしれないような授業の内容を見せていただいて、これから社会に出たときには、子どもたちが総合的に判断できるような能力を身につけるための授業がされていることを理解できました。そういったものを協議会の委員として親御さんたちに伝えていくことも必要なのではないかと感じたところです。

(市長) 運営委員として授業参観に携わることができて、教科書に載っていないような中身の授業も含めて、それらを保護者に伝えられるのではないかとというのは、開かれた学校としての伝達方式なのではないかと思えます。東日本大震災のときに「津波てんでんこ」について徹底的に教えられていた地域の子どもたちは誰も亡くなっていなかったという話を聞いたことがあります。一方で、海から8キロ離れた大川の話も印象的です。ある講演会に参加して大川小学校を見に行ったら、大川小学校は海辺から8キロ離れているということを知りました。8キロというとおおよそ新庄から舟形までの距離になります。舟形の川が溢れて、新庄市役所に来るといようなことです。想定が非常に難しいものであったと思えます。地震が来たから高台に逃げろ、と言われて助かったのは90何人かのうちの5人くらいであったと聞きました。海辺に住む人々ならば皆逃げるはずですが、8キロ離れた小学校まで届く津波は本当に想像を超えるようなものだったのだろうと思えます。実際に行ったことのない人からすると想像が難しいとは思いますが、8キロという数字を聞くと本当に信じがたいことが起きたのだと感じます。授業でオレオレ詐欺について取り上げていたというお話でしたが、自分の祖父母に、授業で教わったから電話では1回名前確認してほしいとか、「オレオレじゃなくてお前誰だ」と言ってほしいなどのような会話を家ですることによって、被害を防げるような生きた授業が確かにあるように思えます。それに、運営協議会の委員の方々が、会議後に意見を言えば学校側も様々な対応が可能なのではないかと思えます。次に奥山委員、お願いします。

(奥山委員) 萩野学園のスキー学習の支援をさせていただいて、スキーに連れて行っている家庭の子ど

もやはり上手だなと思いました。また、萩野学園では保護者の方やおじいちゃんおばあちゃんたちが支援に出てくださいるため、低学年の子が練習に参加してもすごく手厚くフォローができています。私に孫はいないのですが、活動に参加すると子どもたちと時間を過ごすことができなくて、交流が希薄になっている今、そのような関係がつくれて、地域と学校とが協力して動くとすごく成果も出るし、関わっている人も元気をもらうということを実感しています。そのため、コミュニティスクールというのは高齢化が進んでいる社会でとても大切な活動なのかなと私自身が思いました。新庄小学校の活動のお話を伺って、コミュニティスクールの運営協議会の他に地域学校協働本部というのがあると書かれていて、お互い関連しているとは思いますが、運営協議会の方は学校の活動の承認などといった感じであり、実際に動くとなると実働部署のような協働本部がすごく大切なのではないかと思います。新庄小学校はすごくスムーズに移行していて、運営協議会の方たちがサポートしてくださる方を集めている、というようなお話だったので、そのようにうまく連携してつながっていけばサポーターも増えて良いのかなと思いました。ただ、見守りをしてくださる方も高齢化しており、次の世代の準備をしておかないと持続可能とはいかなくなるように思いますので、サポーターを今のうちから増やしておくことがとても大事であると考えます。また、ボランティアリストのようなものが前からあると思いますが、随時更新していかなければいけないのかなと思います。それから、ITのような新しい分野についても必要になってくると考えられるので、サポーターを呼び込む活動が今後より必要になってくるのかなと思います。先ほど栗田委員がおっしゃったように、ラインやメールなどでサポーターを募集すると、来てくださる方はたくさんいるのではないかと思います。そのために、何か広報活動などのシステムづくりをするとたくさんサポーターを集めることができるのかなという感想を持ちました。運営協議会のリーダーは誰で、会議の内容を決定している方はどなたなのかということと、コロナ禍で先生方も多忙になっていると思うので、新しくそういうことをする必要はないと言われても、会議がある、それから何かしなくてはいけないとなると、先生方にとっては負担になってしまうのかという点についてお伺いしたいです。

(市長) ここで奥山委員からが出たのは、関わることで元気が出るということ、教えることで新しく学ぶことができるということです。この新庄小学校の報告の中でも、児童生徒を通して活気が出てきたという感想がありました。このことが今後の活動のポイントになってくるのかなと思います。ただ、学校運営協議会の運営のリーダーとして催しについての決定などを行うことによって、先生方への負担が実際に減るのか、という点は今後考えていく必要があります。また、栗田委員からもあったように、教員のサポートをすることによって、子どもたちと向き合う時間をどれだけ確保できるかということ、運営協議会の方で行事を組むことによって、働き方改革に逆行するようなさらなる重荷になってしまうことはないのか、という懸念点もございます。その点について、高橋校長先生、お願いします。

(高橋校長) 本校の場合は、最初に関わっていただいた方々の活動は継続という形で、例えば図書ボランティアの方々の場合、読み聞かせの活動から始まり、選書や貸し出し業務まで活動の幅を広げるなど、無理なく進めていただけているように思います。また、クラブ活動で教員が苦手としている分野をやってみたいという子がいた場合、教えるためには教員と一緒に学んでいくしかなく、教員にとっては負担になると思っています。ですが、こういう時にこちらからピンポイントでお願いをして来ていただくということができれば教員の負担は減るのではないかと思いますし、子どもたち

もより専門的な物を学べるのではないかと感じております。先ほど、誰が周知をしているのかというご質問がありましたが、教頭が案内を出したり、私と内容を決めていたりしていることが多いです。それは学校として当たり前であると思っております。新しいことをクラブ活動でたくさん入れた時に、担任の先生方は理解してくれるのかという不安がございます。加えて、ピンポイントでお願いするものとは別に、登録制のように常時20人から30人のサポーターの方がいて、遠足のときは来てくれるとか、掃除がちょっと大変な時に見てくれるなどといったサポートをお願いして、そのような環境が当たり前になれば教職員の負担感も減るのではないかと考えており、来年度力を入れて参りたいと思っています。

(市長) その負担感というのは、これまでの教育の世界と比べるのではなく、これからの時代に則して考えなければならないと常々感じております。開かれた学校として様々な活動の実施を考えているところですが、そのような活動は学校でやることではなく、時間になったら速やかに下校し、社会教育として活動を行うことが適切だと思う方もいるかと思えます。クラブ活動や奉仕活動などは社会教育が受け皿で、学校教育ではないと割り切るような分け方で然るべきであり、現在は学校教育の中に社会教育や家庭教育が入り過ぎていて、一般的に家庭教育に分類される箸の持ち方やご飯の食べ方まで学校教育に入っているようで、教職員の負担はかなりのものではないかという意見もでございます。日本の教育の歴史の中で言えば、人格教育や道徳教育を含んで日本の教育があると言われているので、細かい分割は簡単ではないと思いますが、逆に言うと、開かれた学校で重荷にならないかも心配であります。次に教育長、お願いします。

(教育長) 新庄小学校の発表を聞いて、協議会の中で課題として話題になったことが、次のボランティアにつながり、活動として少しずつ実現ができていけば、運営協議会を開いて良かったと思えるようになっていくのだらうと思います。学校が様々なことを背負いすぎていると言われていますが、私も高橋校長先生がおっしゃっていたように、サポーターが集える環境の整備が必要であると考えています。新庄小学校では、校舎1階のあじさいルームをコミュニティルームとして開放できる準備を進めていきたいという話がありました。このあじさいルームは、もともといつ誰が来てもいいように空き教室を利用しようというような話からできたものでした。そのような環境を、校長の中で引き継ぎながらやっていこうと話をしていたところですが、先生方は老人クラブや外の人が入ってくると、接待などで関わらなければならないという意識が強いように思います。ところが、外部の人が気楽に来て子どもたちが休み時間に遊びへ行くことができる、その結果地域の人と子どもたちが関わるができる、というのが理想であります。また、そのような場があることで世代交流を始めることができるのではないかと考えております。かしこまって準備の必要性を考えてしまうと、先生方の負担感につながってしまうのではないのでしょうか。地域の人が集まることのできる場を開放して、地域の人と子どもたちがかわりを持てる環境を整備することが重要になってくると思います。私はその環境ができたなら、先生方がそれを見守ることも一つの考え方として、意識を変えていく必要があるように思います。加えて、学校運営協議会というのは、学校の支援会議ではなく、活動に関わった人が元気になって、その方々が交流して地域づくりにつながるのだ、ということを考えていく必要があるのだらうと思います。活動に関わった人同士で何か一緒に子どもたちのためにできることを考えていくことで地域づくりにもつながっていくということを私は考えて、これを取り組んでいくべきだと思います。

(市長) 活動していることが社会参加していることであるという意識を作るのは容易ではないように思います。自分はこの地域に住んでよかったなという思いがあり、活動に参加して、学びや感動があったりなどといった経験を通して、次の活動で他のサポーターをリードする役割を担うというのは、かなりハイレベルなことであります。地域づくりの中で新しく人を入れて、一緒に活動をしようというだけでは困りますが、活動に来る人たちをサポートするというレベルのサポーターもいると、先生の重荷もとれるのかなと思います。教職員経験者のOBなどの手をお借りして、一緒に活動に参加できる環境を作ることができるのであれば、声掛けもできるのではないのでしょうか。

(奥山委員) サポーター同士の声掛けの件について、私は実際にスキーなどの活動に行って楽しかったと思うのですが、他の人との関わりが少ないのか、なかなか声掛けをするのは難しく、誘いづらいように思います。また、読み聞かせに来てくださる人を見ていても、同じ方がいろんなところの活動に参加していて様々なことをやっているようなのですが、活動に参加している人数自体は多くない現状であると思います。なので、活動に参加している人はいろいろな情報を得てやっているようですが、知らない人は情報を知らないままというような現実があるように思います。そのため、何か別の方法で広報活動をする、このような活動をしていることを知らなかった人がどこかで情報を得て、サポーターがたくさん来るようになるのではないかなと思いました。加えてもう1点、社会教育や家庭教育の役割だとは思いますが、今、家庭が危ないのではないかと危惧しています。先程、本合海小学校の授業でカッターを扱って授業をしていたというお話があったのですが、最近の子どもたちは体験がすごく不足しているような気がします。危険が伴うことは大人の方で見えていないとできないことなので難しいことであるとは思いますが、そこについて支援する人がいれば、家庭でできない活動を子どものうちに体験できる機会を与えられるのではないかと思います。学校に任せるのはおかしいかもしれませんが、学校の場所を貸し出すなどして体験をサポートして経験させてあげなければ、経験の乏しい大人になってしまうのではないかなと思うので、家庭の体験不足を何とか教室でさせてあげることも大事なのかなと思いました。

(斉藤委員) 今、奥山委員が言ったことに関連して、もし機会があったら話をしてみようと思っていたことがあります。この間「伸びる子どもは〇〇がすごい」というテーマの本を読みました。榎本博明さんという心理学者の方が、大学生向けにアンケートをとった結果についてなのですが、生活体験で「日曜大工でのこぎりを使ったことがあるか」と聞いたら、22%の大学生が「使ったことがない」という回答だったそうです。また、自然体験の中では「生きた魚に触ったことがあるか」という質問に対し、64%の大学生が「直に触ったことがない」、「木登りをしたことがあるか」という質問に対し、41%の大学生が「したことがない」、「ミミズに触ったことがあるか」という質問に対し、72%の大学生が「触ったことがない」という回答であったというデータがありました。やはり今、奥山委員がおっしゃった通り体験をする機会が少なくなっているように思います。体験によって本人は集中力や自発性、総合的判断がついてくるとその本には書いてありまして、体験が少なくなっている現状に警鐘を鳴らしているような書き方をされていました。そういった観点から、学校運営協議会の役割を見ますと、やはりそこで子どもたちに、自然体験の機会を与えることが大切なのだろうと感じました。本合海小学校の取り組みの中で、1つ良いなと思ったものを紹介させていただきたいです。放課後子ども教室の中で味噌づくりをしたというお話です。つくったものは公民

館で保存していただいているそうで、1年後にそれを使って味噌を使った料理をするために、館長さんが保管されているということでした。子どもたちは1年後にそれで何かを作ることを楽しみにしているのだらうと思いました。そういった普段はなかなかできない体験ができるというのはとても重要であると思います。ぜひ、学校運営協議会の中でもそういったものを作っていただくよう、校長先生の思いにも沿いながら提案ができれば良いのかなと感じているところです。

(市長) 私たちが子どものころは、木登りをしていたら枝が折れて頭から落ちる、縄を張ってブランコを作ったら締めが弱かったために落ちる、というような経験をして、遊びの中でも様々学んでおりました。最近のゲームというものはなく、冬場は家の中も寒いので、体を温めることも兼ねて、外に行き夕方になるまで雪玉合戦などをして遊んで汗をかいて帰って、家でお風呂に入って温まるというように時間を過ごしていたかと思います。また、学校から帰って家にいたら手伝いに呼ばれてしまうのが嫌で外に出る、という子どもなりの実体験の知恵もあったように思います。しかし、今の時代は家の中も、車も発達しています。車の普及により事故が多くなり、子どもたちを家の中に置くようになった家庭もあるかと思います。そこで普及が始まったのがテレビゲームです。テレビの発達とテレビゲーム、これにより子どもたちは屋内で遊ぶ機会が大きく増えたのではないのでしょうか。近年では共働き世帯も多いため、親が見ていることができない時間には危険ができる限りないような過ごし方をさせる必要があります。しかし、子どもたちが学習するために最終的に必要となるのは本物の体験であります。ただ、体験の機会が少ないという現状もございます。そこで、学校現場では「これまでは」から「これからは」に切り換えていく必要があると私は思います。今回のテーマの大きな課題として、学校側が負担にならないかということが挙げられます。一方で、社会は体験ができる機会が減ってきていて、子どもたちにその機会を与える必要があるように思います。これまでの先生方は重荷を背負って、責任感を持って、家庭でできないことまでも私たちが、という責任感の基で学校教育をやってきたのではないかと思います。これまでの教育界の素晴らしさだと思いますが、今後も同様に続けていくことは可能なのでしょうか。子どもたちに本当の体験をどこでさせるべきか、学校だけではなく行政も関わるべき問題であるように思います。そんな意見の中で、もう1周りずつご意見をお願いします。

(栗田委員) 学校運営協議会の目玉は、地域学校協働活動であるように思います。そういった場合に、学校の職員の負担増にならないことがまず一番だと思います。その地域学校協働活動で大事なものは、先生方が必要としているものを提供すること、そして最終的なねらいである先生方が子どもと向き合う時間をより多く確保していくために、出来ることを実施することが一番大事だと思っています。そのためには、学校の教頭先生が頑張るのではなく、地域学校協働活動推進員という人に中心になっていただいて、様々なことを組み立てるといったことが大事になってくるのではないかと思います。まだ仕組み自体知られていない事も多く、推進員の活動のあり方も、周囲の方々が理解していない部分があるかと思うので、今後は研修等も必要になってくるのではないかと思います。以前、登米市の小中一貫教育校に視察に行ったことがあるのですが、その小中一貫教育校では、学校運営協議会ができる前に、学校を支援する企業の後援会というものがありませんでした。その企業後援会では何をやるかという、それぞれの企業から1年間に100万円程度のお金を出してもらって、電子黒板を4台買ったという話があるのです。学校運営協議会も重要ではありますが、そういうものが学校ごとにあると、すごく助かるなと思ったところでした。

(齊藤委員) 今のお話を聞きながら、学校運営協議会のこれからというところで、やはり先生方の負担減と、学校運営協議会の委員さん方が、お互いに参加して良かった、楽しかった、或いはやりがいがあるなどといった気概が持てるような取り組みが必要だろうと思います。また、その輪を広げていくことによって、地域と学校との関わりが広がっていくような気がいたしますので、まずは時間に余裕のある方が活動できる場を、この中に少しでも取り入れて、その楽しさを伝えていければ、地域の方にとっても、子どもたちにとっても有意義な時間になるのではないかと思いますし、地域の歴史文化が特に伝えられる良い機会になると思いますので、その輪を広げることが大切だろうと思いました。

(奥山委員) 教育長がおっしゃったように、地域の方と学校の先生たちが全然気兼ねなくいいような関係になると協働活動がうまくいくのではないかと、会議の中に若い人を入れることで、新しいアイデアなどを吸収できたり、若い人たちからの支援や参加も得られるのではないかと思います。

(教育長) 運営協議会などで感じている子どもたちの体験が少ないなどといったことに関して、それをどのように改善できるかを考えたときに、学校ではこういうことができる、地域ではこんなことが提供できるということをお互いに話して実践してみることが重要であると思います。話だけで終わらずに、次に何をするか、運営協議会の今後の動きに期待したいところです。お互いに課題を共有して次につなげるための動きをしていく必要性があるのではないかと思います。また、私も小中一貫サミットで岩手の大槌小学校に行った際、大槌は津波で大きな被害を受けて学校もなくなったりしているのですが、一貫校の中に地域の人が自由に入ることができる部屋があり、その部屋には実際に地域の人がいらっやっていたようでした。その中で、児童の商店街見学などのような校外学習の協力に関するお話などをして、地域とつながりを持っているようでした。そのようなコーディネーターのような人がいることで、協働活動の進み方に差が出るのではないかと思います。実際に、新庄にそのような人材がいるのかという問題もあります。地域の方の中で、そういう存在が地域と学校とをつなぐ役目を果たしてくれるのではないかと思います。今、校長会から要望されていることとして、そのような存在の人を学校に、週1回程度でもいただきたいと思います。はじめは中学校区だけでもいいので、つなぎ役をつくることで先生方と地域の方との情報の共有も円滑にでき、活動が見えるのではないかと思います。そういう要望は来ておりますが、なかなか問題があって実現には至っていないため、このような点について、行政として考えていかなければいけない部分なのではないかと考えております。最後に、私は様々なことをしたときに、子どもだけでなく親の学びの場も社会教育の中でもっと考えていかなければいけないのではないかと思います。現在もそれぞれの施設で頑張っていただいておりますが、それ以外にも親のような大人の方々が地域のことをもっと知る場が必要であるように思います。市役所でも、新採職員が新庄市の歴史を学ぶ研修があるように、市民の方に対して、社会教育課として大人の学びの場をこれから考えていくべきではないかと思いました。

(市長) ありがとうございます。全体的に手探りの状態ではありますが、方向性としては地域の中であり方を考えることがとても大事だということは共通していると思います。特に、先生方の負担をど



う減らすかということ、コーディネーターの方を配置することができるのであれば、気楽な形でアイデアや行動が増えるのではないかと思います。また、参加する方も、先生に迷惑かけてしまうかもしれないから活動にいくべきではない、などと思われることがないように、地域と学校をつなぐコーディネーターの重要性を皆さんのお話の中で感じました。私の中で、最初は図書教育を充実させるということからスタートして、開かれた学校を実施していきたいという要望と、子育ての中で非常に課題となってきている特別支援のお子さんが増えてきているということについてなど、ポイントをとらえてはいたところですが、地域全体という形で地域の教育力の向上はなかなかできていないということがあります。公民館制度を残すべきだという考え方ではあったのですが、社会教育とは、多目的な形ですべてをサポートしていくものであるのに対し、最近では青年団や婦人会、交通安全の会やカモシカクラブのような単一目的の団体が増えているように思います。多目的団体の参加者が団体の中で勉強して、そこから目的別に団体が分割され、さらに生涯学習が進むことによって、生きがい教育というものができたのではないのでしょうか。その単一目的の団体の知識を社会へ還元している実例が、栗田委員の紹介してくださった厚木市のレパトリの広さなのではないかと思います。学校の中につくることは難しいようなクラブ活動には、活動するためのサポーターが必要で、声掛けする人の存在が重要になってくると思います。そういう意味でいくとやはり公民館もポイントになってくると考えられます。学校の運営協議会と重複するような形で公民館職員の方々が入れればまた動きが出てくるのではないかと思います。会社を退職した人や、お孫さんはいないけれど、健康で活動的な人などをうまく機能させる、この点については学校というより社会教育の活動になるのではないのでしょうか。新庄市の大きな課題が今日の話の中で見えてきたのではないかと思います。結論を出すのは難しいことではありますが、これからも教職員の方へ重荷となつてはなりません、子どもが健やかに目標を持って育てることが、教育の醍醐味だと思います。明確な結論まではありませんが、ラインなどの SNS を使って仲間を広げていくことは、地域の方へ活動を呼びかけるための一つの手法としては良いのではないかと思います。

#### 4. その他

なし

#### 5. 閉会

午後 4 時 28 分閉会する。